

カール・ロジャーズとパウル・ティリッヒによる 悩みの解決についての一考察

見 玉 龍 治

1. はじめに

友久は、人間が持つ悩みは、大きく二つの種類に分けることができると述べている。一つは、日常生活を送るうえで障りとなる悩みであり、例えば、職場での対人関係、経済的なこと、子どもや家族の悩みなどである。これらは、人生をより良く生きるための悩みであり、この世に生を受けてから後天的に生じた悩みであり、個人的な悩みということができるとされている。

一方、もう一つの悩みは、人間の根元的な悩み、全人類に共通する悩みである。自分はなぜ生まれてきたのか、生きている意味は何なのか、死んだらどうなるのかなどの悩みがこの部類には入るとされている。⁽¹⁾

友久は、前者の、人生をより良く生きようとする個人的な悩みを、仮に心理的悩みと呼び、後者の人類共通の悩みを宗教的悩みと呼びたいと述べている。

そして、こうした心理的悩みに対してはカウンセリングが求められ、宗教的悩みに対しては宗教が求められるとされている。⁽²⁾

友久が述べているように、人間がもつ悩みは、確かにそのように大きく二つに分けることができるだろう。しかし、一人の人間のなかで、心理的悩みと宗教的悩みが、ときに重なりあうこともあるのではないだろうか。

宗教的悩みは、人間の「生・老・病・死」に関係して起こってくるものであり、なかでも死に関係して起こってくるものであるとすれば、死の関わる悩みを抱える人たちは、宗教的悩みを持ちつつ、同時に心理的悩みも抱えている可能性が考えられる。

筆者はこうした問題意識から、死に対する悩みを抱える人たちには、宗教とカウンセリングを同時にあわせもつような、両者の接点としての宗教的カウンセリングが求められるのではないかと考えている。

ところで、「カウンセリングの神様」とも称せられ、カウンセリング実践家

であり、臨床心理学者であるカール・ロジャーズは、神学者であるパウル・ティリッヒと、ティリッヒが晩年を迎えたとき（1965年）に対談を行っている。その対談の記録は残されており、宗教とカウンセリングとの接点や、「生き死に」に関わる悩みを抱える人たちへの宗教的カウンセリングについて検討する手がかりがそこにはあるように考えられる。

そこで、今回の論文では、この両者の対談の検討の前段階として、まず、ロジャーズとティリッヒのそれぞれが自らの生活史（ヒストリー）のなかで抱えてきた、自分自身の悩みに対してどのように取り組み、解決しようとしてきたのかについてたどり、比較検討していきたいと考えている。

2. ロジャーズによる悩みの解決

ここでは、カウンセリング実践家であるロジャーズが、その生活史のなかで自らの悩みにどのように取り組んでいったのかをたどっていききたい。

〈幼少期のロジャーズ〉

ロジャーズは、1902年、アメリカの中西部のイリノイ州シカゴ郊外オークパークにて、6人兄弟の4番目の子として生まれた。ロジャーズの上には、兄が二人、姉が一人いた。そして、後には、弟が二人生まれた。

父ウォルター・アレキサンダー・ロジャーズは、ウィスコンシン大学を卒業し、ロジャーズが生れたときには、エンジニアの分野での気鋭のビジネスマンであった。母ジュリア・マーガレット・クシングも大学で学び、二人とも17世紀に大西洋をわたった祖先をもっていた。彼らは、敬虔なプロテスタントであり、宗教上の理由から働くことに価値をおいていた。

また、ロジャーズ家の宗教の基本仮説は、「自分たち家族は、他の人たちとは違う、神に選ばれた者としてふさわしく振る舞わなくてはならない」というものであった。また、母は、家族の祈りに「神の眼からみたら、人間の正しさなどはきたないぼろ布みたいなもの」という聖書の言葉をよくひいた。ロジャーズは、後にこの言葉が自らの胸に長年「突き刺さっていた」と語っている。また、ロジャーズは両親により、アルコール、ダンス、タバコなどから遠ざけられ、厳格で、妥協のない、宗教性と倫理のなかで育てられた。

そして、父のビジネスがうまくいき、両親は、農園をほしがっていたことと、思春期の子どもを持つ家庭は誘惑の多い都市の生活から離れたほうがよいという考えを持っていたことから、1914年、家族はシカゴの西48キロのワーウッドに広大な農園を買い取り、移住することとなった。こうした両親の考えや行動

により、ロジャーズは、同年齢の仲間との親密な関係を持つことができず、親友をつくることができなかった。

しかし、農場での生活は、ロジャーズの後の研究生活に大きな意味をもたらすこととなった。ロジャーズは、大きな蛾にこころを奪われるとともに、実際に捕まえた蛾を育て始めた。また、ロジャーズは、父親が行っていた科学的農場管理にも大きな興味を抱いた。

〈宗教への関心〉

1919年、ロジャーズはウィスコン大学農学部に入學した。これは、家族の伝統と生活史からして不自然なことではなかった。なぜなら、両親や兄弟が全員この大学で学んでいたからである。このように、ロジャーズのウィスコンシン大学への入学は、彼が家族の価値観を暗黙のうちに取り入れていたことを意味するものであった。

しかし、この大学入学をきっかけとして、ロジャーズは実家を離れ、寮生活を始めることとなった。それは彼自身の大きなパーソナルな変化と成長への出発点となった。ここで、ロジャーズは、両親とはスタイルも意図も異なった体験をし、それが彼の思想と情緒の解放を実現していくこととなった。知的・情緒的なエネルギーが活性化し、やがて、ロジャーズの関心は、次第にクリスチャンとしてなすべきことに絞られていった。

また、大学1年生のときに、ロジャーズは、デスモニスで開かれた世界学生キリスト教連盟会議に参加し、そこで回心体験があったことを後に語っている。やがて、ロジャーズは、2年生の終わりには、牧師になる使命を確信し、専攻を史学（歴史学）に変更し、宗教活動に役立つ基礎を身につけることを決意するに至った。

〈中国旅行〉

そうしたなか、1922年、ロジャーズは、中国北京で開かれる世界学生キリスト教連盟大会に出席するわずか12人のアメリカ代表の1人に選ばれた。この旅行は6ヶ月以上におよぶものであり、ロジャーズの知的、スピリチュアルな成長の分岐点となるものであった。この旅行で、ロジャーズは、純粹で誠実な人々がさまざまな異なった宗教上の信条や考えを抱いていること、そして、そうしたことがあり得るのだということを知るようになった。

ロジャーズは、この旅のあいだずっと『中国日記』を書き続けたが、自らの考えが徐々に揺らぎ始める様子を、次のように書き記している。

「僕はただ、『本当のこと』を知りたい。その結果、たとえキリスト教徒でなくなってもかまわないから」⁽³⁾。

また、その末にロジャーズがたどりついたのは、次のような考えであった。

「イエスは神ではなく、人間だったのだ。つまり、彼は史上最も神に近づくことのできた一人の人間なのだ」⁽⁴⁾。

この旅行をふりかえって、後にロジャーズは、「両親の宗教思想から解放され、両親と同じ考えになることはできないことに気がついた」、「…他のいかなる時期にもまして、この時期に私は独立した人間になったと信じている」と述べている⁽⁵⁾。

こうしてロジャーズは、両親からの本質的な独立を東洋に向かう6ヶ月の旅の期間中、つまり家族の影響から離れたところで成し遂げることとなった。そして、その期間中、ロジャーズは、「イエスとの新たな深い人格的關係」によって支えられていたのだった。

ロジャーズは、中国旅行からの帰国の際の思いを次のように述べている。

「帰国の船旅のある夜、真の喪失感というか、ショックを感じました。私は神という見方をやめるのだと思うと。でも、さらに考えを進めていくと、なにか…理屈だけではない、前進させるより強い基盤が、神的存在（a divine being）がここにいると考えるよりも、感じられて。だから特に混乱した感じはなかったですね。それに、家族には受けいれてもらえなくても、自分が開かれた感じで…「育った宗教を失ったなあ」とは思いませんでした。その感じはまったくなかった。自分の宗教観を著しく変革した感じでした」⁽⁶⁾。

しかし、中国から帰ってきた直後、ロジャーズは十二指腸潰瘍との診断を受け、5週間の入院と1年間の休学を余儀なくされている。両親からの自立に向けた心理的たたかいが、彼にとって、苦しみと葛藤に満ちたストレスフルなものであったことがうかがえる。実はロジャーズ家の6人兄弟のなか、3人が潰瘍に苦しめられている。ロジャーズは、こうしたことに関して、「穏やかだけれど、抑圧的な家庭の雰囲気」のためであると説明している。

〈ユニオン神学校での体験〉

1924年、ロジャーズはウィスコンシン大学史学部を卒業し、宗教的な仕事に就く（牧師になる）準備として、当時アメリカで最も開放的（リベラル）なことで知られるユニオン神学校に進むことを選んだ。この神学校において、ロジャーズは重要な体験をすることとなった。

ロジャーズたちのグループは、彼ら自身の問題や疑問を自分たちでじっくりと探究し、その行きつくところを見つけていきたいと思うようになった。そこで、ロジャーズたちは、教授のいない、カリキュラムは自分たちが提起する問題で構成され、しかも単位が取得できるゼミナールを認めてほしいという要求を教授会に申請した。

この申請に対して、学生を信頼した学長のアーサー・クッシュマン・マッグフェルトはロジャーズたちの要求を承認した。唯一の条件は、教授会のメンバーである若い教師が一人、参加することであったが、その教師は学生が求めれば発言するというものであった。

この「リーダー・レス（リーダーが存在しない）」ゼミナールは、ロジャーズたちにとって、深い探究ができたと同時に、結果的に半数くらいの学生が神学部を離れるという、大きな混乱を招く体験となった。そして、これを契機にロジャーズは自分自身の人生観の形成に向かい、長い道のりを歩み始めることとなった。また、ロジャーズはこうした経験から、ある特定の宗教的教義を信仰することが求められるような分野で働き続けることはできないと予見するようになった。ロジャーズは、後に「ある職業にとどまるため、一連の教義体系を信じつづけなければならないことは、私にとっては、たいへんおぞましい（身⁽⁷⁾の毛のよだつ）ことのように思えた」と述べている。

また、ロジャーズは、後年、こうした出来事を含めたユニオン神学校での経験を次のように述べている。

「…ともかく、それは自由に進めるゼミナールで、深い哲学的宗教的問いを発することもできて、徹底的に深めることができました。私は本当に助けられました。そう、ユニオンのすべての経験が私を助け、それから一つの哲学的立場をとる自由を得ました⁽⁸⁾」。

「私はユニオンで過ごした日々⁽⁹⁾に少しの後悔もないし、去ったことに対しても同じです。神学校が嫌で去ったわけではありません。そこでの日々を、大いなる宝だと考えています」。

〈神学から心理学へ〉

ロジャーズは、こうした経験から、ついに牧師になる道を断念する決断に至った。そして、自らの自由が制限されないような分野を探し、1926年に、それまで聴講生をしていたコロンビア大学教育学部に進むことにした。この時点において、ロジャーズは心理学の道を歩き出すこととなった。

しかし、この進路変更の直前、ロジャーズは再び十二指腸潰瘍になっている。こうしたことからすれば、この決断が、再び彼の心身を消耗させることにつながったことがうかがえる。

3. ティリッヒによる悩みの解決

ここでは、神学者であるティリッヒが、その生活史のなかで自らの悩みにどのように取り組んでいったのかをたどっていきたい。

〈幼少期のティリッヒ〉

ティリッヒは、1886年、ドイツのベルリン近郊の寒村シュタールツェデル（現在はポーランドのスタロジードル）で、牧師である父ヨハネス・オスカー、母ヴィルヘルミーネ・マティルダの長子（長男）として生まれた。ティリッヒは、夜中を30分まわった頃に、難産の末に生れたが、その日のうちにも生死の境をさまよった。このときの体験による影響か、ティリッヒは生涯を通じて死の恐怖を持ちつづけ、存在と非存在との葛藤を抱えていくこととなった⁽¹⁰⁾。

出産時の様子について、父ヨハネスは彼の両親に宛てて、次のように書き送っている。

「パウルはまだ生きていますが、その生は死との絶えざる戦いです。この幼い生命は、多分この戦いに勝つでしょうが、それは多分としか言えません。その呼吸は、いつ停止するかもしれません。私たちは、今夜すでに三度も諦めました。…彼は7時間近くも断末魔の状態にあった後、ふたたび体温を取り戻しましたが、それは私たちにも恐怖でした。この興奮、怖れと希望のあいだの動揺は、努めて自制しているものの、私たちにとっても死ぬ思いです」⁽¹¹⁾。

1888年、妹ヨハンナ・マリーが生れた。また、1891年には、ティリッヒ一家は、父が教区長となった新任地シェーンフリースへ転居した。1893年には、二番目の妹エリザベート・ヨハンナ・マティルダが生れた。この町の外側には近くに湖があり、ある日、そこでティリッヒと父はボートを浮かべていたとき、

ひどい嵐にあい、ボートを少し離れた陸に放置し、命からがら歩いて家に帰ったことがあった。このときの風波の記憶からか、ティリッヒは、ある夜、湖からものすごい高波が押し寄せてきて城壁を超え、町をひと呑みする夢をみたことがある。この湖に起こる嵐は、ティリッヒにとって脱自的な経験となり、また、非存在の脅威（存在が失われる脅威）を象徴するものであった。⁽¹²⁾

〈信仰に対する疑い〉

1900年、父ヨハネスがベルリン教区長に任命され、ティリッヒ一家は、ベルリンに転居することとなった。一方、ティリッヒのギムナジウム、つまり高等学校教育は、家族がシェーンフリースから移住する前から始まっていた。1898年、ティリッヒは、ケーニヒスベルグの人文主義的ギムナジウムに入学し、1901年、父の転任に伴ってベルリンのフリードリッヒ・ヴェルヘルム・ギムナジウムへ転学した。

ティリッヒは、この多感な少年時代、現実と対応するのに困難を感じ、しばしば空想の世界のなかに身を引くこととなった。彼自身は、そうした空想の世界について、それは外側の世界よりはるかに真実なものに思われたと述べている。

父ヨハネスは、正統神学を堅持し、キリスト教の真理を疑う者を容赦なく糾弾した。そのため、父の存在は、信仰に対して懐疑的になっていた少年ティリッヒのところに畏怖の感情を呼び起こした。このとき、ティリッヒがところを打ち明け、その告白の聴聞者となったのが、父の教会の副牧師（助手）であった青年エーリッヒ・ハルダーであった。彼はルター派であり、神学の基本をなす「信仰による義認」ということを保持していた。しかし、神学的には自由主義者であり、ティリッヒに疑うという贅沢を許し、彼の成長途上に大きな助けを与えた。

〈母の死〉

1903年、ティリッヒと父との間にあって壁となってくれた、母ヴィルヘルミーネ・マティルダが癌で亡くなる。それは、彼にとって、この世で唯一の拠りどころを失う体験といえるものだった。また、母親が亡くなったことにより、父親の影響は増し、ときに啓示の権威とも同一視したこの父親の権威から自己を解放しようと深い内面的な戦いに没頭することとなった。そして、そのことにより、ティリッヒは、罪の感覚を抱くこととなった。

母親が亡くなったとき、ティリッヒは母親を唯一の拠りどころとしていたためか、その拠りどころを今度は妹のヨハンナに求めるようになった。やがて、

二人は、非常に親密な関係になり、最も深い考えや感情まで共有するようになった。そして、彼女は他の誰よりもティリッヒにとっての理想の存在となった。

〈大学生として〉

1904年の冬学期から、ティリッヒはベルリン大学で神学を学び始めた。そして、ある日、ティリッヒは、偶然的にも、ある書店でシェリングの『全集』を見つけ、衝動的に購入することとなった。このことは、ティリッヒにとって後の学問的運命を決定する大きな出来事となった。

その後、1905年の夏学期、ティリッヒは、シェリングの母校であるテュービンゲン大学に移った。そして、1905年の冬学期、今度はハレ大学の神学部に移り、学部の長老であったマルティン・ケーラーから、罪人ばかりではなく、信仰に疑いを抱く者さえも、恩寵（神の恵み）によって義と認められるとの洞察が与えられた。この考え方が見いだせたことで、ティリッヒは、限らない慰めを感じることができた。

ハレ大学で4度目の学期を終了し、1907年、聖職に就く試験準備のため、ティリッヒはベルリン大学に戻った。そして、その後1年余りは、その試験準備と博士の学位を得るための課程を修めることに励んだ。

ところが、学校の監督官で、父の友人でもあったエルンスト・クライン牧師から助手になってほしいとの申し出があり、ティリッヒはその申し出を受諾した。1909年、ティリッヒは、ベルリンに近い農村のリヒテンラーデで教会の助手となった。ここでの数ヵ月間、ティリッヒは、密のような芳香を漂わせる花をつけた菩提樹に囲まれながら、学位論文「シェリングの哲学的発展における神秘主義と罪責意識」に取り組んだ。

1909年の年末、ティリッヒは先の神学論文を完成させていた。しかし、ベルリン市が1910年8月1日以前に哲学の労作を発表している哲学の博士学位取得候補者には奨学金を出すと発表したことから、シェリングについての第二の論文に取りかかった。そして、ティリッヒは、「シェリングの積極哲学における宗教史の概念—その前提と原理」をブレスラウ大学に提出し、大学は彼に哲学博士の学位を授与した。

ティリッヒは、神学上の学位のための最終試験に合格し、また、先の本来の学位論文である「シェリングの哲学的発展における神秘主義と罪責意識」をハレ大学に提出し、神学上の学位を授与された。こうして、ティリッヒは、1912年、大学での学生生活を終了した。

〈夢みる樂園との別れ〉

1912年、ベルリンの労働者地区モアビットの教会で、副説教師をしていたティリッヒに、妹ヨハンナと彼の友人であるアルフレート・フリッツの結婚の知らせが届けられた。妹ヨハンナに母のかわりとなる拠りどころを求めているティリッヒにとって、この結婚は二度目の母との別れ、また夢みる樂園との別れを意味するものであった。

1913年、ティリッヒは、ハレ大学の職を得るために、大学教授資格論文に取り組み始め、2年後の1915年に「啓蒙主義時代のドイツ神学における超自然の概念」を完成させた。

〈第一次世界大戦のなかで〉

1914年、第一次世界大戦が始まったとき、ドイツの青年たちの多くは、戦争の正当性やドイツの勝利を疑わず、戦場に参加した。ティリッヒもそのなかの一人であり、迷わず従軍牧師として志願した。ティリッヒは、西部戦線での戦いに参加し、激戦のさなか塹壕や洞窟のなかで礼拝を司式したが、これまでの生活とは全く異なる状況のなかで、はじめて理念としての戦争ではない、現実の戦争を強く意識するようになり、生と死にかかわる問題に直面することとなった。

1916年2月、ティリッヒの属する師団は、フランス東北部のヴェルダンで激戦を展開した。しかし、6月には師団は戦場を離れたことから、ティリッヒは7月にハレ大学に戻り、論文を提出し、その後、神学部の私講師に任ぜられた。

しかし、再び動員されたティリッヒは、10月、北部フランスのシャンパーニュで激闘のさなかにあり、負傷者と死にゆく者とのあいだを駆け巡った。その残酷さのために、彼の精神は限界状況に達し、破綻する寸前に追い込まれた。11月、ティリッヒはすっかり暗い気分にとらわれ、エルンスト・クライン牧師の娘であるマリア・クライン宛てに次のような手紙を書いている。

「私はいつも、最早生きていないのだということを身にしみて強く感じています。だから人生も真面目に考えないのです。誰かを見つけ、喜び、神を知る—これは凡ての人生に属することですが、人生そのものがもう頼りになる土台ではないのです。私がいつ死ぬかも知れないというだけでなく、誰もが死ぬ、しかも本当に死ぬからです。それに人類の苦難があります—私は、徹底した終末論者ですが、それは世界が没落するというような子どもじみた空想からではなく、実際にこの現代の没落を体験しているからなのです。私の説教は、殆ど

いつも「終末」についてです。…ただ時に、私は本に絵を貼りつけたり、諸学問の体系について考究したりして、苦しみから回復するのです⁽¹³⁾」。

〈神なき信仰〉

1917年、哲学することが果たして真の天職であるのかを決め兼ねていたティリッヒは、しばしば希望と絶望とのあいだをさまよった。そして、そうしたプロセスで、ティリッヒは、「信仰を通して神の恩寵（恵み）によって義と認められる」というキリスト教固有の思想を拡大解釈し、知的に神を疑う者も、存在の自己肯定（恵み）によって、非存在（罪）の脅威（疑い）を克服できるという「神なき信仰」（パラドックス）に到達することとなった。これはティリッヒの迷い（悩み）を解決すると同時に、伝統的な神の代わりに、非存在⁽¹⁴⁾（無）即根源的存在という新しい神の啓示をも意味するものであった。

4. ロジャーズによる悩みの解決とティリッヒによる悩みの解決の比較検討

ここでは、これまで述べてきたことをふまえた上で、ロジャーズによる悩みの解決とティリッヒによる悩みの解決を比較検討していきたい。まず、悩みの種類について考えていきたい。

ロジャーズは、幼少期において、「穏やかだけれど、抑圧的な家庭の雰囲気」のなかで育ち、暗黙のうちに家族の価値観をとり入れながら成長してきた。ロジャーズはこうした環境のなかで、自分らしくあることを許されないという悩みを抱えてきた。

一方、ティリッヒは、幼少期において、難産の末に生まれ、生死の境をさまよったという経験を持ち、このときの体験による影響からか、彼はその後存在と非存在との葛藤を抱えていくこととなった。また、ティリッヒは同じく幼少期に父と共にひどい嵐にあい、命からがら歩いて家に帰るという体験をした。この湖に起こる嵐は、ティリッヒにとって、非存在の脅威を象徴するものとなった。こうしたことから、ティリッヒは、非存在という、存在の根底が揺るがされるような悩みを抱えることとなった。また、ティリッヒは、信仰に対して懐疑的になるという悩みも同時に抱えていた。

こうしたことからすると、ロジャーズにおける悩みは、友久がいう悩みの分類で考えると、人生をより良く生きるための悩みであり、心理的悩みを中心とした悩みであると考えられる。一方、ティリッヒにおける悩みは、同じく友久

がいう分類で考えると、人間の根元的な悩み、全人類に共通する悩みであり、宗教的悩みを中心とした悩みであると考えられる。

次に、悩みの解決方法について考えていきたい。

ロジャーズは、自分らしくあることを許されないという悩みを抱えていたが、大学に入学し、家族から離れて生活し、家族以外の人たちと関わるなかで、様々な価値観にふれることとなった。そして、そうした経験を積み重ねるなかで、次第に家族の価値観とは異なる自らの思いに目を向けるようになっていった。

また、中国北京で開かれる世界学生キリスト教連盟大会に出席するために6ヶ月にわたる船旅やユニオン神学校での「リーダー・レス」ゼミナールを通して、ロジャーズは自らの本当の思い（真実の自己）にじっくりと向き合い、そして、行動することができるようになっていった。こうしたプロセスを経て、ロジャーズの悩みは解決されていくこととなった。

一方、ティリッヒは、信仰に対して懐疑的になるという悩みをかかえていたが、その悩みに関しては、父の教会の副牧師であった青年エーリッヒ・ハルダーにより、疑うという贅沢が許され、大きな助けを得ることができた。また、ティリッヒは、ハレ大学の神学部における長老であったマルティン・ケーラーの影響により、信仰に疑いを抱く者さえも、恩寵（神の恵み）によって義と認められるという洞察が得られることとなった。この考えを見出せたことは、ティリッヒにとって限らない慰めとなった。

そして、この信仰に対して懐疑的になるという悩みとともに、非存在という、存在の根底を揺るがされるような悩みを持つなかで、ティリッヒは、知的に神を疑う者も、存在の自己肯定（恵み）によって、非存在（罪）の脅威（疑い）を克服できるという「神なき信仰」（パラドックス）に到達することとなった。これは、伝統的な神の代わりに、非存在（無）即根源的存在という新しい神の啓示をも意味するものであった。こうしたプロセスを経て、ティリッヒの悩みは解決されていくこととなった。

こうしたことからすると、ロジャーズにおける悩みの解決方法は、人と人との関係のなかで、家族の価値観とは異なる価値観にふれたり、話し合いを重ねるなかで、じっくりと本当の自分（真実の自己）を見つめ、出会い、そして、その思いに基づき行動することであったと考えられる。一方、ティリッヒにおける悩みの解決方法は、人と人々が共に神（人間を超えるもの）との関係のなかで信仰を深めていたり、人が神（人間を超えるもの）との関係のなかで、

同じく信仰を深めていくことであったと考えられる。

註

- (1) 友久久雄（2010）仏教とカウンセリング、友久久雄編 仏教とカウンセリング、法蔵館
- (2) 前掲書(1)
- (3) 諸富祥彦（1997）カール・ロジャーズ入門 自分が“自分”になるということ、コスモス・ライブラリー
- (4) 前掲書(3)
- (5) Rogers, C. R. (1961) “This is Me.” The development of my professional thinking and personal philosophy. Rogers, C. R. On Becoming a Person, Houghton Mifflin.（諸富祥彦・末武康弘・保坂亨訳（2005）ロジャーズが語る自己実現の道、岩崎学術出版社）
- (6) Carl R. Rogers & David Russell (2002) The Quiet Revolutionary.（畠瀬直子訳（2006）カール・ロジャーズ 静かなる革命、誠信書房）
- (7) 前掲書(5)
- (8) 前掲書(6)
- (9) 前掲書(6)
- (10) 大島末男（1997）ティリッヒ 人と思想、清水書院
- (11) Wilhelm and Marion Pauck (1976) Paul Tillich his life & thought, Harper & Row.（田丸徳善訳（1979）パウル・ティリッヒ 1 生涯、ヨルダン社）
- (12) 前掲書(10)
- (13) 前掲書(11)
- (14) 前掲書(10)

キーワード カール・ロジャーズ パウル・ティリッヒ 悩みの解決